

新しい時代に向かって

社会的信頼を培う認証制度に

内山 充

今世紀初頭以来、幾多の不祥事例に対する反省から、企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility）が世界規模で唱えられるようになった。あらゆる組織集団は、日常活動の中で、コンプライアンス（法令順守）はもとより、社会的な公正さや、人類愛に基づく貢献、あるいは環境への配慮などによって、社会的信頼度を高める努力を惜しまず、むしろそれを積極的にアピールしていかなければならない時代になった。勿論、われわれ薬剤師集団も例外ではない。

ところが、わが国ではこの数年、監査法人や建築士などの専門職による意図的な偽装や違反が多発し、次いで大手企業特に食品関連の老舗における故意の法令違反や表示偽装、さらには贈収賄や行政の不作为など、組織集団の中で社会的行動の責任を負うべき者達による無責任な行動が次々に明るみに出て、憂慮すべき事態が起こっている。

これら、わが国で見られた欠陥や矛盾の殆どは、当事者による正しい自己判断の欠落によるところが大きい。今こそ、社会的な活動をする全ての者は、自律的な評価の心構えをしっかりと持つことが必要である。薬剤師も、自己の職能の及ぶ活動範囲の中で、決して社会的に無責任な行動を行ってはならない。

折も折り、専門医の認定に絡む不正な行為が、昨年 12 月 31 日の朝日新聞に報道された。これは、例外的な事例であると思いたいが、自己研鑽による資質向上が医療職の社会的信頼を支える大きな柱となっていることを思えば、他人事として安易には看過し難い問題である。このような場合には往々にして「第三者による評価体制が必要」というコメントが出されるが、評価体制といっても、規制や摘発の制度では問題の解決にはならない。同じ職域にあるもの同士が自己責任のもと一致協力して、客観的評価によって質の維持と向上に努めるという自律的な体制が確立されなければならない。

現在、当薬剤師認定制度認証機構の志向している生涯研修プロバイダーの認証は、まさにこのような Accredited（信じて任せる）体制の確立を目指している。これまでに認証を受けた各プロバイダーは、このことを十分に理解しており、プロバイダー相互の連絡協力のもと、薬剤師の各分野の信頼に応える実質的な「研修」と、その成果に基づく「認定」を行いつつある。

やがて、生涯研修が自己研鑽の域を脱して免許の更新条件につながる時が来れば、研修の質を保証する客観的認証の必要性は、さらに確認されるものと考えられる。その時には、わが国の薬剤師の生涯研修体制が、信頼性の高い社会システムとして広く社会に認められるに違いない。